

K.O.

## 第15回 KO本大賞

書名	著者名 他	出版社	ジャンル
コメント（公開用に一部編集しています）			

大賞

100万回死んだねこ： 覚え違いタイトル集	福井県立図書館	講談社	その他
--------------------------	---------	-----	-----

ウロ覚えだっていいんだ、司書にリクエストしてみよう！どんな小さなヒントからでも利用者のリクエストを見つけ出す、司書の仕事を見てほしいな。

これはもうそりゃね、という本ですが1票入れたくなりました。タイトル当てのなぞなぞとして読んでもよし、正タイトルに導いた司書の手腕に感嘆してもよし、自分も困ったら図書館に聞いてみようと思ってもよしです。

覚え間違えたタイトルでも司書に聞くとこんなに正しい本にたどり着けるんですよっていう事例集。間違い方が半端なかったりするけど、ちゃんと推理して見つけてくれる様子は、名探偵みたい！こんな司書になりたいな～

司書はどんなうろおぼえにも応えるよ。

図書館利用のハードルが下がって、気軽に司書に質問してもらえるようになったら嬉しい。

司書って何してるの？の疑問が少しわかります。

「レファレンス」を楽しく知ってもらえる。今年一番、司書が出版を楽しみにしていた本ではないでしょうか。

図書館はいつでも覚え違い大歓迎です。

図書館が好きな人はもっと好きに、図書館が苦手な人はちょっと親しみを感じられる、そんな本です。

あまりの覚え違いの数々と、導き出される正解とに、笑いと称賛が入り混じる。レファレンスや司書の仕事への興味も期待できる。

こんな「あるある」ネタで盛り上がりたいものです。

司書に本を探してもらうときにきちんと本のタイトルを言えていますか？とたずねたくなるような面白い覚え間違いの本のタイトルがいっぱいです。ぜひ読んで欲しいです。

図書館を利用したくなります。

2位

お探し物は図書室まで	青山美智子	ポプラ社	小説
------------	-------	------	----

連続短編みたいになっているので、読書をあまりしない人でも読みやすい。ほっこりと少しウルっとする優しい作品。

自分の進む道に迷った時に、読んでほしい本です。

司書がおすすめした思わぬ本が背中を押してくれる。

疲れているとき、落ち込んでいるときにちょっとだけ元気をもらえる、背中を押してくれる本です。

羽鳥区のコミュニティハウス図書室で司書の小町さゆりさんにレファレンスを依頼すると適切な資料を探してもらえ、人生の悩みも解決してくれる？仕事や人間関係に悩む人々が小町さんに紹介された本をヒントにしてやりたい事の手がかりを掴み前向きな気持ち・行動に向かっていく。元気づけられ心がじんと温くなる。

風変わりな司書に紹介された意外な本を通じて、いろんな人たちがそれぞれの悩みを解決していきます。「図書館って、やっぱりいいね！」と思えますよ。

素敵タイトルを裏切らない本です。図書館に親しみを持ってもらうきっかけとなってほしいです。

司書の小町さんのユニークさと名言の数々にノックアウトされました。「どんな本もそうだけど、書物そのものに力があるというよりは、あなたがそういう読み方をしたっていう、そこに価値があるんだよ」という言葉が個人的にとっても好きです。仕事がテーマなので、高校生には共感しにくいかもしれませんが、進路や生き方にモヤモヤした時に思い出してほしい一冊です。

3位

クララとお日さま

カズオ・イシグロ

早川書房

小説

とても読みやすい文章。読みきることにチャレンジして欲しい。

クララのひたむきさと一途さをはらはらしながら見守りました。終盤のちょっと不思議な部分について、生徒と「アレはなんなんだろう??」と話しました。

AI技術が発達する現代世界で、遠くない未来を想像させてくれるSF小説です。主人公クララはAIを搭載したアンドロイドですが、感性までも備えているようなコミュニケーションをするので、読んでいてたくさんの感情が動かされます。

「科学技術が進歩してどんなに優れたAIロボットができたとしてもやはり人間には適わない。」を実感させられる。

人工知能を搭載したロボットのクララは、病弱の少女ジョジーのお世話係として購入される。2人は友情を育んでいくが少女は成長し、大人になっていく。クララは役目を終え、孤独のまま捨てられていく。人工知能が感情の領域まで達したクララの悲しさは、人間がどうロボットと向き合うのかの関係性を問いかける重さがあります。様々なことを考えさせられる1冊です。

3位

スモールワールズ

一穂ミチ

講談社

小説

人生って人の数だけあるものです。誰一人同じ人生の人はいません。いま自分の置かれている場所が世界のすべてだと思っているかもしれませんが、それはほんの小さな世界でしかないのです。そんなことを気づかせてくれる一冊です。

タイプの違う短編それぞれに登場人物たちの表の顔とじんわりと滲む何かが絶妙で、それをどう感じるのかを楽しんでほしい。

6つのワールドがあります。あなたはどんな光景を思い描くのでしょうか。チクリと胸が痛くなるものもあれば、とてつもなく暖かくなるものも。

収録されている6作品は、連作短編のようにつながっている部分もありますが、趣はすべて異なります。「ピクニ

ック」はすっかり騙され、読み返しました。次作も楽しみです。

時に不気味で恐ろしく、時に温かく感動的な「小さな世界」＝家族を描いた読み応えある短編集。人間心理のあやを描くのが上手い。直木賞ノミネート作品。

5位

君の顔では泣けない

君嶋彼方

KADOKAWA

小説

自分の中身と自分の外側、どちらにひっぱられて生きていくか。自分だったらどうしようといういろいろと考えるお話です。

高1の夏に入れ替わった異性同士の2人。それから15年たつ。果たして元の体に戻れるのか？結婚、出産、仕事があり、元の家族との関わりもある。タイトルの本当の意味を知ると切ない。フィクションとしてありがちな設定かもしれませんが、最後まで飽きることなくぐいぐい読まされます。とにかく夢中になれる本を読みたい人にオススメ。

入れ替わりによる男女の違い、友人との接し方、そして家族のことが丁寧に描かれている。タイトルの意味を考えさせられる。読んだのはつい最近だが、生徒にお勧めしたい。

高校生同士で男女入れ替わり、15年経つという過酷な現実を生きる二人の、経験してきたリアルな違和感、それでも前を向いて相手を思いやりながら生きる、究極の絆は一読の価値あり。

男女の入れ替わりのお話は珍しくありませんが、15歳から15年間の細かい心理描写が共感できると思います。ラストもいい！

5位

正欲

朝井リョウ

新潮社

小説

「多様性」はきれいな概念ではない、とはっきりと描かれている。隣り合うこととつながることのしんどさと汚さと希望がぜんぶ詰まっていた。

いろんな趣味嗜好をもつ人がいることを思い知らされる、横浜が舞台になっている小説です。

決して爽やかな内容ではないですが、多文化共生やジェンダーが話題に多く取り上げられる中で、ぜひ立ち止まって考えてほしい内容が織り込まれています。

ぜひ読んでください。心に余裕があるときで構いません。読後に心に残るものがあつたら、それはこれからずっと心の片隅に置いておいて、ときたま取り出して考えなければいけないものかもしれません。一緒に考えてほしいです。考えましょう。

「多様性を認める」とはどういうことなのかを考えさせられる作品。性的嗜好などについて深いところまで描写されているので、生徒に大っぴらには勧めづらいいけれども読んで欲しいなと思う作品。朝井リョウが好きな子が借りて行って、「めっちゃよかった」と言っていた。